

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：34314

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720245

研究課題名（和文） 近現代上方歌舞伎の伝承に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental study about the tradition of modern kabuki of the Kamigata (Kyoto-Osaka area)

研究代表者

斉藤 利彦 (SAITO TOSHIHIKO)

佛教大学・宗教文化ミュージアム・学芸員

研究者番号：10399058

研究成果の概要（和文）：

本研究は近現代上方歌舞伎の伝承について、とりわけ裏方と称される舞台技術者が伝えてきた「演劇的知識（演劇知）」や技芸・技術について、文献史料はもとより、聞き取り調査という民俗学的手法を用いて明らかにし、現代歌舞伎への伝承をうながし、なおかつ、「近世上方歌舞伎」の近代での展開を解明することを目的としたものである。

研究成果としては、戦後関西歌舞伎の小道具方の修行内容や伝承内容・系譜・過程を聞き取り、具体的に明らかにすることできたことや、これまで未発見であった関西歌舞伎の小道具附帳の発見とその分析を行えたこと、さらに、本研究の調査過程で、初代中村魁車と京都の知識人との関係について調査し、未発見の資料の発掘などができたことである。

研究成果の概要（英文）：

This research about "the dramatic knowledge (演劇知)", and the arts and technology which the stage engineer especially called a backroom person has conveyed about the tradition of modern kabuki of the Kyoto-Osaka area, from the first, literature historical records are clarified using the folkloric technique of an interview, and tradition to present age kabuki, and, moreover, it aims at solving deployment in the modernization of "modern kabuki of the Kyoto-Osaka area."

As the result of research, the contents of practice of the property man of Kansai kabuki, and the contents of tradition, genealogy and a process were able to be caught after the war, and it was able to clarify concretely.

Furthermore, discovery, and digitization and text-izing of stage-properties 附帳 of the Kansai kabuki which was undiscovered until now were performed.

Furthermore, it is an investigation process of this research and is that investigated the relation between Nakamura Kaisya the first (初代中村魁車) and the intellectual of Kyoto, and the excavation of undiscovered data, etc. were completed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	1, 100, 000	330, 000	1, 430, 000
2010 年度	500, 000	150, 000	650, 000
2011 年度	400, 000	120, 000	520, 000
年度			
年度			
総 計	2, 000, 000	600, 000	2, 600, 000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：上方歌舞伎、関西歌舞伎、伝承、裏方、舞台技術者、小道具方

1. 研究開始当初の背景

(1)申請者は従前より、近世上方歌舞伎について研究を進めているが、その一環として、役者をはじめとした歌舞伎関係者に対して伝承に関する聞き取り調査を行い（調査期間：2005年～現在）、そこから前近代の歌舞伎の姿を抽出している。この調査によって「裏方」と呼ばれる歌舞伎の「舞台技術者」の技術と知識の伝承が急速に失われつつあることに注目し、舞台技術者への聞き取り調査も開始していた。

(2)この着想は、講談調査推進委員会のメンバーとして人間国宝桂米朝氏に聞き取り調査を行った際、芸能者への聞き取りは個々の芸談だけでなく、前近代からの伝承も知り得るという知見を得たからである（2005年、於：ワッハ上方）。

(3)この知見を応用し、近現代上方歌舞伎が伝承してきた内容を抽出し、そこから「近世上方歌舞伎」の近代での展開を明らかにできるものと構想した。また本研究で実施する聞き取り調査内容の資料化とその社会的活用は、申請者が2004年～2007年所属した研究機関において従事した無形文化財の上演と資料化とその活用によって得た研究意義と技術内容を背景としている。

2. 研究の目的

(1)現在、技術伝承途絶の問題、いわゆる2007年問題がわが国の国際競争力の低下を予測する社会問題となるなか、このような伝承途絶の問題は古典芸能の世界にも広がっており、特に歌舞伎は、役者の意識の変容や生活環境の変化、裏方と呼ばれる舞台技術者については定年退職による離職や後継者不足に

より、これまで伝えてきた技芸や技術、知識の伝承を急速に失いつつある。

この問題について体系的に調査・分析したのが東京文化財研究所編『近現代歌舞伎の伝承に関する研究』（東京文化財研究所、1999年）や日本俳優協会の一連の調査と成果（『歌舞伎を支える技術者名鑑』日本俳優協会、1984年、『歌舞伎の舞台技術と技術者たち』、日本俳優協会、2000年）だが、近現代上方歌舞伎の伝承については十分に明らかになっていない。

これは従来の近現代歌舞伎研究が近代における「近世歌舞伎」の展開を等閑視したため、実演の現場との隔たりがおこり生じた問題点である。特に舞台技術者の伝承してきた技術や知識は、舞台演劇としての歌舞伎を支えるものであり、伝承途絶は歌舞伎に技術の消滅を意味し、歌舞伎存続の危機を招く要素をもっている。

(2)本研究は近現代上方歌舞伎とその舞台技術者の伝承に焦点を絞り、文献資料調査と聞き取り調査によって、近現代歌舞伎が伝承してきた「技術」と「知識」、「情報」の基礎データを収集し、基礎データの資料化と保存化を行ったうえで、近現代上方歌舞伎が内包する「近世歌舞伎の展開」について考察を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

(1)研究を推進していくための研究環境整備と基礎データ収集の文献史資料調査・聞き取り調査を行い分析していく。この調査は文献史学的方法と民俗学的方法を用い伝承関係資料を収集する。

(2)聞き取り調査は、特に舞台技術者を重点対

象として行い、基礎データ収集と資料化、収集資料の調査成果の研究を進め、近現代上方歌舞伎の伝承について分析を行う。同時に調査成果である基礎データの資料化を随時行っていく。

4. 研究成果

(1) 初年度

- ①研究を推進していくための研究環境整備と基礎データ収集としての文献史資料調査・聞き取り調査を重点的に行った。具体的な成果は以下のとおりである。
- ②京都の画廊が所蔵する近代上方歌舞伎役者の書簡資料の調査を行えたことである。とりわけ、初代中村魁車と医師との書簡について調査ができたが、魁車の人となりやうかがえ、本研究にとり意義深いものであった。この調査により、魁車の京都における人脈、人的交流を明らかにすることができた。また同時に、大正期に作られたと思われる上方歌舞伎役者を中心とした色紙帖も調査、撮影を行い、分析を実施した。その結果、魁車を中心とする色紙帖であることが判明した。加えて、二代目市川右団次の書簡を入手し、その解析を行った。
- ③後述する舞台技術者への聞き取り調査のなかで、各種小道具の附帳を閲覧することができた。この資料はこれまで未発表のもので、近現代上方歌舞伎、特に「関西歌舞伎」時代の舞台技術関係の伝承を明らかにするうえで大変貴重なものである。

(2) 二ヵ年目

- ①舞台技術者への聞き取り調査は、昨年度同様に鋭意進めたが、特に小道具方の聞き取り調査を重点的に実施した。とりわけ、関西歌舞伎の凋落時代の地方巡業の実態を聞き取ることができたのは、これまでの研究状況からして大きな成果であったとい

える。具体的には、二代目中村鴈治郎の一座の裏方にはいった関西松竹社員からの聞き取りから、当時の地方巡業時の人的交流や1日のタイムスケジュール、慣習などを聞き取ることができた。また松竹の小道具方であった人物から、昭和36(1961)年8月、毎日ホールにて開催された「上方歌舞伎を護る七人の会」に関して聞き取り調査を実施、この公演のなかで復活された「鯉つかみ」の小道具や仕掛けを聞き取れたことは大きな成果であると考ええる。同時に三代目実川延若丈に関する聞き取りも行った。

- ②昨年度入手した関西歌舞伎時代の小道具の附帳についても調査・整理を行い、疑問点などは小道具方に確認するなどした。

- ③昭36年毎日ホールで開催された「上方歌舞伎を護る七人会」のおり、復活した手打ちの小道具の実相を把握することができた。

(3) 最終年度

- ①歌舞伎役者の芸談にある伝承関係記事の分析をすすめ、そこから、近現代上方歌舞伎、ひいては歌舞伎の「芸」の伝承について考察をすすめた。
- ②上方歌舞伎愛好者への聞き取り調査を、当該研究の補足調査として行った。研究者、あるいは舞台関係者が見落としがちな上方歌舞伎の姿、特に技芸や役者の「風」について知見を深めることができたのは大きな収穫であった。
- ③舞台技術者への聞き取り調査については、小道具方へのヒアリングに特化し、戦後の地方巡業に関して、具体的な日程と公演場所、そこでの逸話や、歌舞伎役者の素顔などについて聞き取りを行った。地方巡業については、とりわけ、九州地域における巡

業時を軸にヒアリングを実施した。勸進元といわれた興行主の姿や、中日における慣習に関して、様々な逸話をうかがえたのは知見を深めることに、大きく寄与した。

- ④従来より検討している小道具附帳については、毎日ホールでの「七人の会」のおりの小道具附帳も確認でき、関西歌舞伎の歴史のなかで、エポックな興行の、演出面を確認できるうえでも、大きな収穫であったといえる。

なお、研究成果の発表は学会誌への発表や学会での口頭報告などを行ったが、講座などの講演などを積極的・精力的に行い、本研究の成果を一般の人々に還元した。初年度は講演 17 回、二ヶ年度は 32 回、三ヶ年度は 12 回である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- (1)斉藤利彦、「村落社会と農村芝居—京都市福知山市北部地域を中心に—」、国立歴史民俗博物館研究報告、有、161 巻、2011、50—71 p
- (2)斉藤利彦、「大学博物館と所蔵写真資料について」、佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要、無、7 号、2011、83—112
- (3)斉藤利彦、『堺市史』編纂と二代目中村富十郎ゆかりの品々」、佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要、無、6 号、2010、59—67

〔学会発表〕(計 3 件)

- (1)斉藤利彦、「ある裏方のみた関西歌舞伎・関西演劇—聞き取り調査を中心に—」、芸能史研究会、2010 年 9 月 10 日、キャンパスプラザ京都
- (2)斉藤利彦、「網野史学と京都文化史学—職人研究の前提としての南北朝期—」、財団法人世界人権問題研究センター、2010 年 4 月 10 日、財団法人世界人権問題研究センター
- (3)斉藤利彦、「近世後期三井寺の大坂宮地芝居再興運動と関わった人々」、財団法人世界人権問題研究センター、2009 年 4 月 15 日、財団法人世界人権問題研究センター

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

斉藤 利彦 (SAITO TOSHIHIKO)
佛教大学・宗教文化ミュージアム・学芸員
研究者番号：10399058

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：